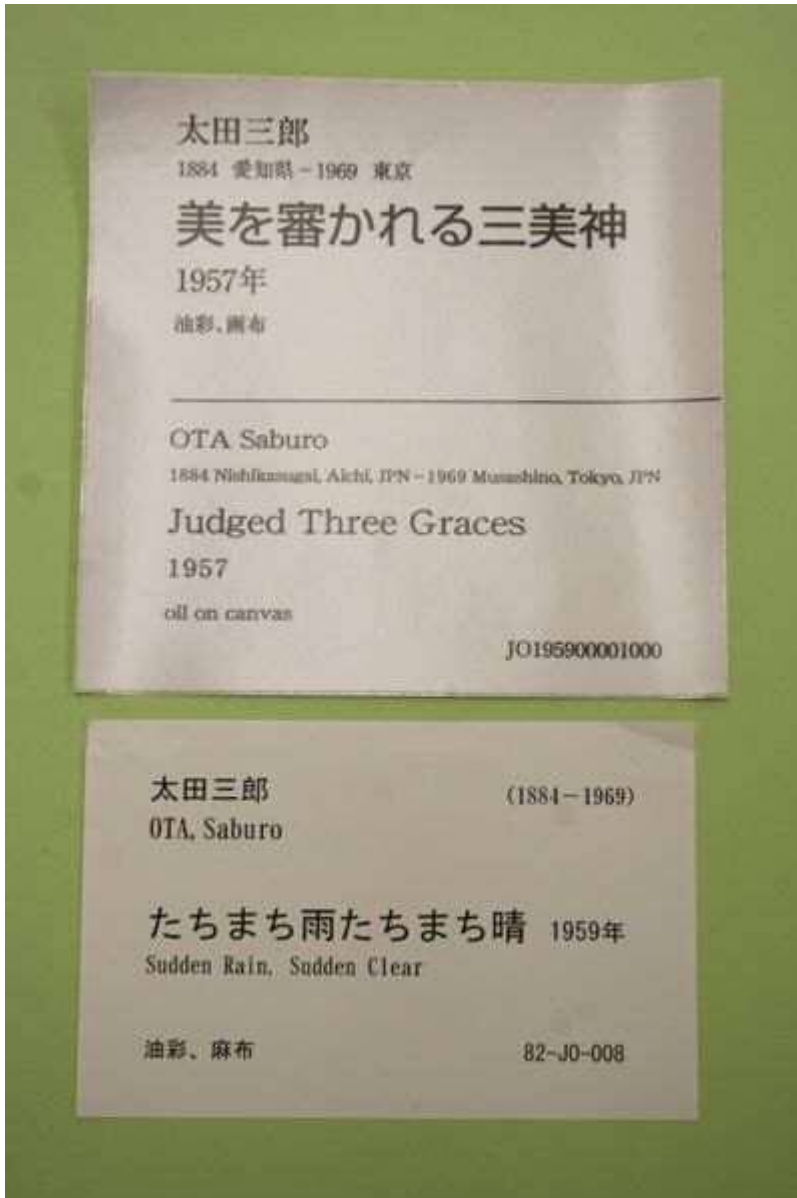


美術館に展示されている作品のそばには、作品の作者やタイトルなどが表示されています。この表示をキャプションと呼んでいます。（図録などに載る図版の横にある表示もキャプションと呼びます。）

美術館によって、また企画展によってキャプションの形や大きさ、表示されている内容は異なります。愛知県美術館所蔵作品展示室で使用しているキャプションは約15×15cmの正方形。上半分は日本語による表記、下半分は英語による表記で、1 作家名、2 作家の生没年と生没地、3 作品名、4 制作年、5 技法材質、6 その他（寄贈者のお名前、木村定三コレクション、寄託作品など）を表示しています。



実は、以前のキャプションはもっと小型で、表示されている情報も少なかったのですが、年齢や居住地、職業などより幅の広いお客様にご来館いただけるように、と改良を重ねてきました。



↑上が現在所蔵作品展で使用しているキャプションの一般的なかたち。下は以前使用していたもの

(注：それぞれ違う作品のキャプションです)。文字が大きくなり、生没地が表示されるようになりました。作家の出身地が自分のふるさとと同じだったりすると、なんだか親近感がわいてきませんか。

そして、キャプションを掲示するために欠かせないのがキャプションケースとアクリルピンです。

キャプションケースは透明なアクリル製で、キャプションを差し込めるようになっています。キャプションケースを使えば、キャプション自体には汚れや傷が付きにくいので、展示替えて作品や作品の位置が変わっても、一度作ったキャプションを繰り返し使うことができます。また、簡単にキャプションを差し替えることができるため、作品が変わっても、同じキャプションケースが使用できるので効率的

です。

キャプションケースには、床や展示ケースに置くことできるスタンド型のものと壁付け型のものがあります。壁付け型のキャプションケースを壁に固定するために使うのがアクリルピンです。キャプションケースに空けられた2つの穴にピンを刺して壁に固定します。アクリルピンとは呼んでいますが、頭部分が透明アクリルになっている、いわゆる画鋲のことですので、みなさんのお宅や職場にもあるかもしれませんね。



↑スタンド型のキャプションケース



↑キャプションケースとアクリルピン

作品を展示する作業よりも先にキャプションを付けてしまうと、作品や作品を持った作業員さんの体にキャプションケースが当たって作品を傷付けてしまう可能性があるため、キャプションを掲示する作業は作品自体の展示が終わってから行います。展示室の壁は堅いので、画鋏を使うようにはいきませんが、同じ壁に掛かっている作品に振動を与えないよう心がけて作業をしています。

※本文中で所蔵作品展でのキャプションを紹介しました 熊谷守一《土饅頭》、ヴィルヘルム・レームブルック《立ち上がる青年》、パブロ・ピカソ《青い肩かけの女》は東京都美術館にて4月25日より開催の「日本の美術館名品展」に出品予定です。企画展ではどんなキャプションが付けられるのでしょうか。

(MI)